

「東京学芸大学の教育研究活動の活性化のために」

村松 泰子 東京学芸大学出版会理事長・東京学芸大学長

今年度から、東京学芸大学出版会の理事長を務めています。すでに3冊の本の発行人にもなりました。任意団体である東京学芸大学出版会の理事長も、国立大学法人の学長も、文化を支える意義ある重要な事業を行う組織のマネジメントの責任者です。どちらも、その目的に向かって活動を遂行していくためには、厳しい市場の経済状況や国の財政事情のなかであって、運営していくための財源確保が大きな課題であり、責任の重さを感じています。

本出版会は設立されてから、まもなく10年になります。最近、体制も少しずつ整い、本の刊行も著者・編集者の努力により、ほんとうに徐々にですが増えてきているようです。

昨今の厳しい出版状況のなかで、研究書など読者の限られた本を刊行するのは、出版社の企画会議を通すのも、なかなか大変だと聞いたり、実際にも経験したりしています。その点で、本出版会は会員であれば出版が可能です。もちろん、出版会であっても、極力多くの方に手にとってもらえる本にする必要があります、経営的な観点からも、著者にいろいろ注文もつくかもしれませんが、それでも、とにかく出版できるという権利は重要ですので、教員はぜひとも会員になっていただきたいと思います。研究を活性化し、研究成果を世に問うことは、大学にとっても、個々の教員にとっても、その存在価値にかかわる基本的で重要な活動です。そのためにも、本学の幅広い専門分野の教員が、こぞって次々

と企画をもちこんでいただければと思います。

また、本学では、大学として教育実践研究推進機構の共同研究や、GPや特別経費により、附属の教員も一緒に、さまざまな取組みをしており、それらの成果が東京学芸大学の名を冠した出版会から、続々と刊行されることも期待したいところです。

あるいは、大学に今年から発足した教員養成カリキュラム改革推進本部を中心に、本学の教育について改善の余地がないか点検していただいています。本学の規模ゆえに同一授業科目を多数開設している場合に、ある程度の標準化が求められます。そのためにも、共同で教科書や参考書をつくり、学生に使ってもらえればと思います。すでにそうした試みは行われており、近いうちに新しい成果も出されるようです。こうした取り組みは、教育内容の改善という意味でも、出版会を多くの学生にも知ってもらうとともに、出版会の基盤をつくるという意味でも、非常に有効でしょう。

今年の9月に、学術交流・学生交流の協定校である北京師範大学を訪問し、キャンパスの一角で表通りに面した北京師範大学出版社の広い店舗を目にしました。刊行している書籍の種類、店舗に置いてある数とも相当大規模でした。これと合い競うのは無理としても、いつか、東京学芸大学出版会刊行の書籍が並び、さすが教員養成大学の中核である東京学芸大学の出版会だと言われるような場ができればというのには夢でしょうか。

大森直樹編著

『子どもたちとの七万三千日 ―教師の生き方と学校の風景―』を読む

―世代を超えて読み合い、読み継ぎたい本―

成田喜一郎 東京学芸大学教職大学院教授

東京学芸大学出版会からお出しになった大森直樹さんの本『子どもたちとの七万三千日 ―教師の生き方と学校の風景―』を読んだ。改めて「教師の仕事とは何か」といった本質的で根源的な問いに向かい合う機会を得た。そして、これから教師をめざす若い人々や現職の先生方、教育学者、市民の方々とともに読み、本質的で根源的な問いをめぐって話し合いたいと思った。

なぜならば、本書には、以下のような際だつ特色があったからである。

(一) 教師自身が〈教師の仕事とは何か〉を物語っていること

子どもたちや教師・学校についてはいろいろな人々が語ることができる。事実、語り続けられてきたし、今日も語られている。また、教育学者は、子どもたちや教師・学校の現状や課題について、様々なデータを収集し分析したり批評したりもしている。

しかし、教師自身が、子どもたちや自分のこと、学校のことを語る機会は多くない。その思い出や風景は、子どもたちや教師の心象に焼き付いている

ことはあっても、語られ出版されることとなると、その数は益々少なくなってくる。

そのような状況のもとで、大森直樹さんの本は、十人の教師たちに、子どもたちと過ごした七万三千日、教師自身の生き方と学校の風景、すなわち、教師のライフストーリーを語る場を設けられた類い希な書である。しかも、どこぞのルポライターが編んだものではなく、紛れもない新進気鋭の教育学者が自らの講義録―十人の教師のナラティブ・アプローチをもとに編まれた書である。したがって、単なる子どもたちと教師との感動のドラマな

どではなく、これまで多くは語られてこなかったわが国の戦後教育史のある断面に光を当て、その現代的意義を探るという研究者の視点で編まれている。その意味で教育学研究の方法としても注目に値する。

(二) 多様な視点から〈教師の仕事とは何か〉という問いへのレスポンスがあること

本書に登場する教師によって物語られたことは、①ともすると居にくい居たくない学級・学校を子どもたちが興味や関心を寄せる「場」に変えていくこと、②教室や地域にある様々な社会的な偏見や差別と四つに組んできた実践、③暮らしや学びの履歴から映し出される子どもたちの実態・実像から構築される教育のあり方、④定められた教育目的や内容との折り合いをもつてながら行う確かな実践、⑤子どもや教師、学校における評価とは何かを見つめ直す機会、⑥教師たちが自ら同僚たちとともに学び究め修養し続けることの意味、⑦教育実践のあり方について保護者と本音で行われる議論の意義などである。

これらは、まさに、現代的な教育課題そのものであり、課題解決を迫られている喫緊のテーマである。これから教師をめざす人々が、やがて教師になったとき、必ず出会うだろう課題であり、現職の先生方にとっては、今まさに直面している教育課題そのものであるはずだ。教育学者にとっては、これらの課題のいずれかを研究対象にし取り組んでいるはずのテーマである。さらに、市民の方々の中にもNPOを立ち上げるなどして学校外からアプローチしている教育課題でもあるのではないだろうか。

いずれにしてもこれらは、教室・学校と社会における



大森直樹編『子どもたちとの七万三千日』
2010年3月刊 1,680円

共時的な課題であるにもかかわらず、なかなか出口の見えない課題である。これについて1950年代半ば～現在に至るまでの約半世紀という時間の中で、十人の教師たちそれぞれが出会った具体的な課題にどう取り組んできたのか、教師自身によって語られている。

(三) 特殊の中の普遍を引き出す経験知・実践知があること

本書に取り上げられた十人の教師は、そのほとんどが過ぎ去った時代の波をかぶっており、また、東京・埼玉・神奈川・大阪の、小学校・中学校、朝鮮初中級学校における限られた経験知・実践知を物語っている。その意味では〈特殊〉な経験知・実践知であることは間違いない。

わたくしを含めてとかく人々は、自分が今存在する場や状況の困難性を過大に評価し、特殊な経験知・実践知、成功事例などを見る度に、やれ「あそこは特殊だ、特別だ、うちの子どもたちや保護者・教師とは違う」とレッテルを貼り、自ら距離を構築してしまうことがままある。

しかし、本書に登場する十人の物語る経験知・実践知には、異なる時空間を超えて通底する普遍的な問い、本質的で根源的な問いが存在するし、また、それへのレスポンスを導き出すヒントが潜んでいると言っても過言ではない。

(四) 未来への希望を託された若い教師の物語りもすっかり編み込まれていること

本書に登場する教師のうち九人は、三十年以上の教職経験を有し、既に退職された方々か間もなく退職される教師である。たった一人、最終章に教職経験一年五か月ほどの若い教師の経験知・実践知が取り上げられている。いわゆる団塊世代に相当する九人のベテラン教師群と新人教師と言っても過言ではないたった一人の教師とを同じ本の中に編み込まれた意図について、大森さんは語っていない。わたくしは、この若い教師がほぼ真っ白な〈キャンバス〉にこれから描くであろう教師としてのライフストーリーへの期待と希望をつなごうとしたのではないかと推察した。大森さんは、この若い教師の物語る話に近い将来教師をめざすだろう学生たちが熱心に耳を傾けていたことにふれているが、まさに、未

来の教師へのバトンが継承されゆく予感すら感じさせてくれる。

以上、本書の特色について述べてきたが、ぜひ、世代を超えた方々と本書を手に取り、読み合い、読み継いでいきたい。

最後に、本書のさらなる充実、あるいは今後の出版企画に期待を込めて、ささやかなる提言を述べさせていただけのならば、以下の三点に集約できる。

まず、本書に登場する十人の教師の物語る話は、大森さんの講義等のなかで、教師をめざす学生たちが実際に聴いていたはずである。だとすれば、十人の教師のライフストーリーに描かれた経験知・実践知を聴き受け止めたとき、如何なる感想や意見、問いを学生たちが抱いたのかを明らかにする本書の続編などの出版に期待したい。

次に、学校における「教師の仕事とは何か」という本質的で根源的な問いを考えた場合、一人の教師の力ではどうすることもできないことが多い。本書の中にも同僚教師たちが学び合う姿が描かれているが、さらに一歩進めて、組織としての学校、組織の中の教師の姿をも描き出す必要はないだろうか。先輩教師と後輩教師、ベテラン教師と中堅教師と若手教師、管理職とのつながりやかかわりなどにも光源を向けていく必要はないだろうか。

これらの期待や必要性は、大森さん個人にだけではなく、東京学芸大学出版会や教育実践・教育研究に関わるすべての人々とともに担っていかなければならないだろう。その意味で本書の書評を書いているわたくし自身への課題でもある。大森さんと読者のみなさんとともに、その新たな課題に取り組めたら幸いである。

さらに一言、書物にとって装丁・装画は格別な意味を持つ。書を手にする方々が最初に目にするのが、書の顔である題字と装丁・装画である。本書の装丁・装画を担当された池上貴之氏、鈴木彩子氏は本書を丹念に読み、装丁を考えられ、この装画を描かれたのではないだろうか。できれば、装丁家・装画家からのメッセージなどもどこかにあるとよかったのではないかと思った。

いずれにしても、多くの方々が手に取って欲しい一冊であることは間違いない。

会員の皆様、その他の学芸大学関係者の皆様

2011年、あけましておめでとうございます。

今年もどうぞよろしく願いいたします。

東京学芸大学出版会は昨年、新しい飛躍を経験した年でした。

まずは昨年度の出版物について報告します(以下編著者の敬称を略させていただきます)。

- 3月** 大森直樹編『子どもたちとの七万三千日』(税込価格 1,680円)
- 3月** 三石初雄・川手圭一編『高度実践型の教員養成へ』(税込価格 2,625円)
- 5月** 東京学芸大学社会科教育学研究室編『中高社会科へのアプローチ(改訂新版)』
(税込価格 2,100円)
- 8月** 矢ヶ崎典隆『食と農のアメリカ地誌』(税込価格 1,785円)
- 9月** 真山茂樹『学芸の森 私の植物』(税込価格 525円)

以上が新刊です。このうち『子どもたちとの七万三千日』は『朝日新聞』でも取り上げられ、本プレスニュースでも成田先生に書評を書いていただいています。ぜひともお手に取っていただきたい本です。

また『食と農のアメリカ地誌』は早くも売り切れ、10月には第2刷を出しました。さらに、従来からの売れ筋であった大石学『江戸の教育力』も6月に(第2版第2刷、税込価格 1,260円)を出しました。新刊5冊、増刷2冊ということになります。1年間にこれだけの数を出版したのは初めてのことです。

昨年の1月には新しい取次会社(JRCといいます)とも契約し、全国の大書店に本を並べるとともに、日本中のすべての書店から私たちの本を注文できるようにいたしました。4月にはインデザインというソフトを使って出版会内部で組版をする体制を整えました。

本年もすでに数点の出版計画があり、うれしい悲鳴をあげているところです。

とは言え、学芸大学出版会はまだ草創期であり、いろいろな苦勞が絶えません。本を出さなければ出版会の発展はありませんが、出すためには投資が必要です。去年は出版のために大幅に刊行費と人件費を増やしましたが、それに見合う利益はまだあげられていません。良書を出し続けるためには多くの方のご協力が必要です。

まずは多くの先生方(附属学校の先生方を含みます)に出版会の会員になっていただき、出版会から本を出していただくとともに、出版会を支えていただければありがたいと存じます。本を出していただくことによって先生方の研究成果が社会に伝わり、そのことが結果的に出版会を支えるというサイクルができればと願っています。本プレスニュースでも村松理事長(学芸大学学長=学芸大学出版会理事長)が書いてくださっていますが、本の出版が困難になりつつある昨今、身近な学芸大学出版会を利用していただきながら、大学からの発信を活発にしていいただければと願う次第です。

希望と願いが入り混じってしまいましたが、今年もどうぞよろしく願い申し上げます。